

論文

宮崎県椎葉村松尾地区における山の神文化

甲斐 峻太¹⁾・奥山 洋一郎¹⁾・滝沢 裕子²⁾Mountain god culture in the Matsuo district of Shiiba Village,
Miyazaki PrefectureKAI Ryota¹⁾, OKUYAMA Yoichiro¹⁾, TAKISAWA Yuko²⁾¹⁾ 鹿児島大学農学部

Faculty of Agriculture, Kagoshima University, Kagoshima 890-0065, Japan

²⁾ 鹿児島大学農学部附属演習林

University Forests, Faculty of Agriculture, Kagoshima University, Kagoshima 890-0065, Japan

Received Nov 29, 2024 / Accepted Jan 31, 2025

Summary

There are a variety of festivals, rituals, and events for mountain gods throughout the country, and it has been revealed that they have existed since the Jomon period. In this study, we revealed that Kagura and slash-and-burn farming related to mountain gods are still handed down in Shiiba Village, Miyazaki Prefecture, a historic place where cultures such as Kagura and the legend of the fallen people of the Heike family remain. However, Kagura was discontinued in the Matsuo district only, and 21 villages in the Matsuo district were surveyed. Therefore, in this study, we clarified the characteristics of mountain god culture in the Matsuo district by investigating the unique mountain god festival in the Matsuo area, where Kagura and slash-and-burn farming related to mountain gods thrive. The results indicated that six villages enshrined a common mountain god, while the other villages enshrined a god of the clan. In addition, 15 villages held their own mountain god festivals.

Keywords: mountain gods, forest culture, shiiba village

キーワード：山の神, 山村文化, 椎葉村

I. はじめに

山の神は古来より全国各地で人々によって信仰されてきた。

しかし、その祭事や習俗は生活圏や職種の違いによって特徴があることが明らかとなっている。ネリーナウマン (1994) によると、山の神は狩猟者の信仰や習俗において獣の所有者または主とされている。また、山仕事や農業を行う人々にとって御利益がある神として信仰されている。

これまでの山の神の先行研究では、柳田ら (2016) が中部、近畿地方の森林組合を対象にした「山の神」祭事の特徴や西川ら (2021, 2022, 2023) が全国の大学演習林や九

州、四国、中国地方の森林組合を対象にした「山の神」祭事についての地域の特徴を明らかにしてきた。今回の研究では、森林組合などの林業事業者での山の神祭事ではなく集落ごとの山の神祭事の特徴を対象としたい。

本研究の対象地である椎葉村は、宮崎県の北西部に位置しており、人口が約2300人、村の96%が山林であり、全10地区に分かれている。また、現代まで神楽や民謡等の伝統文化を継承している村で、地区ごとに独自の文化が存在している。尾向地区や不土野地区では、山の神に御神酒やお供え物をあげる祭事として神楽や焼畑が毎年行われている。しかし、椎葉村の人口は年々減少しており、これに伴って、神楽等の祭事が高齢化や担い手不足によって消滅

表-1 各集落の人口・世帯数・調査日・回答者

No.	集落	人口	世帯数	調査日	回答者
①	畑・鳥の巣	33	16	9月5日	S・Fさん(女・80代)
②	竹の八重・③野地	34	16	9月6日	A・Mさん(男・80代)
④	中尾・小ヶ倉・佐土の谷	28	14	9月8日	N・Mさん(男・70代)
⑤	水越	10	7	9月17日	S・Kさん(男・80代)
⑥	小河内・蟬の尾	42	21	9月17日	S・Mさん(女・80代)
⑦	上松尾	16	10	9月18日	N・Sさん(男・70代)
⑧	唾谷	24	10	9月18日	N・Hさん(男・90代)
⑨	栗の尾	19	11	9月18日	N・Kさん(男・80代)
⑩	下松尾	106	44	9月19日	M・Tさん(男・90代)
⑪	岩屋戸	75	37	9月19日	K・Rさん(男・70代)
⑫	ロクロ	11	6	9月20日	Y・Kさん(女・70代)
⑬	春岩尾・新石原	19	12	9月21日	S・Mさん(男・70代)
	小原	7	4	9月17日	(該当なし)
	中の八重	22	12	9月17日	(該当なし)
	石原	16	9	9月20日	(該当なし)
	小計	462	229		

している地域があり、地区ごとで山の神文化に変化が起きていると考えられる。椎葉村では伝統的に各地区で神楽が実施されてきたが、松尾地区では神楽を行っておらず、途絶えている。

そこで本研究では、山の神と関連した神楽や焼畑などが盛んな椎葉村において、伝統行事である神楽が途絶えた松尾地区における山の神祭事を調査することで、松尾地区における山の神文化の特徴を明らかにする。

II. 調査方法

1. 調査対象

椎葉村の松尾地区において、集落の祭事を知悉している住民を対象に70代から90代までの合計12人に聞き取り調査を実施した。その概要は表-1の通りである。

2. 調査内容

質問項目は、(1) 開催時期、(2) 神社・神様の特徴、(3) 祭事が盛んだった頃と今の規模(参加人数)、(4) 実施内容、の計4項目である。

III. 調査結果

(1) 神様の種類

(市山様)

複数の集落で「市山様」が祀られていた。「市山様」の正式名称は「市山槇嶽大明神」で地域での山の神とされており、性別は女性である。小河内・蟬の尾集落の市山神社にある市山槇嶽大明神が本家であり、ロクロ集落の市山槇嶽大明神は分家で他の集落は猟師によって市山神社の存在を

知り、持ち込まれたことが明らかとなった。

(氏神様)

各集落に存在するその集落の土地を守る神様であり、市山様のような山の神とは異なる。しかし、市山様を祀っていない集落の人々にとって山の安全や恵みに感謝する対象としての存在、山の神に準じる存在となっていることが今回の聞き取り調査により明らかとなった。

(2) 各集落の人口・世帯数

各集落の人口・世帯数を表-1にまとめた。人口が少なく規模が小さな集落は近辺の集落と合わせて集計した。また、回答者の欄で該当行事なしと記載している集落は、山の神祭事を行っていなかったため対象外とした。

(3) 各集落の山の神祭事

①畑・鳥の巣集落

神社の名称：畑伊勢神社

神様の呼称：氏神様

毎年、旧暦の11月21日に祭事が行われている。午前8時に畑・鳥の巣集落の公民館に集まり、しめ縄作りや祭事後の食事の準備を行う。9時になると畑伊勢神社に集まり、しめ縄や切った御幣を鳥居に飾り、神前に御神酒や米・塩・御神酒をあげ氏神様に手を合わせる。その後、畑・鳥の巣神楽が舞われる。3年に1度は栗の尾神楽も招いて合同で神楽を舞っていた。しかし、現在では神楽は舞われていない。祭事の規模は、30年前は50~60人程であったが現在は数人でしか行われていない。

②竹の八重集落

神社の名称：竹の八重神社

神様の呼称：氏神様

毎年、旧暦の5月23日と旧暦の11月10日に祭事が2回行われている。午前9時に竹の八重神社に集合して各家から前日に作ったしめ縄や御幣を持ち寄って鳥居に飾る。また、この集落では神社を囲む一本一本の木にしめ縄を結んで御神酒の入ったかけぐりを木のそばに置いていく。その後、神棚に5月の祭事では1年の月の数（12or13）御神酒の入ったかけぐりを供え、11月の祭事では、集落の人の数かけぐりを供える。祭事の規模は、30年頃前は、30～40人程であったが、現在では、10人程で行っている。

③野地集落

神社：野地神社

神様：氏神様

毎年、旧暦の5月23日と11月10日に祭事が2回行われている。午前中に野地神社に集まり、しめ縄を作り、御幣を切って鳥居に飾る。神棚に御神酒をあげて米を撒き氏神様に手を合わせ、その後、白太鼓が行われていた。しかし、現在は行われていない。祭事の規模は、30年頃前は30人程度であったが、現在は数人でしか行われていない。

④中尾集落

神社：稲荷神社

神様：市山様・氏神様

毎年、旧暦の6月8日と11月8日に祭事が2回行われている。午前中に稲荷神社に集まり、しめ縄を作り、御幣を切って鳥居に飾る。その後、神社の周りや少し離れた特定の木にしめ縄を結び、紐で2本くりされた竹に御神酒の入ったかけぐりと呼ばれるものを置いていく。現在は、参加人数が少ないため神社周りの木のみである。作業後に、神棚に1年の月の数（12or13）御神酒の入ったかけぐりを供え米を撒き氏神様と市山様に手を合わせる。その後、昔は神社や周辺の家で皿踊りが行われていたが、現在は行われていない。祭事の規模は、30年以上前は、60～70人程であり、この中には神社のない佐土の谷・小ヶ倉集落の人々も参加していた。現在は、数人でしか行われていない。

⑤水越集落

神社：稲荷神社

神様：氏神様（稲荷大明神）

毎年旧暦の11月24日に祭事が行われている。30年前は、午前中に稲荷神社に集まり、前日に作ったしめ縄や御幣を切って鳥居に飾る。また、神棚に御神酒をあげて米を撒き氏神様に手を合わせる。その後、18時から24時まで水越神楽を舞っていた。当時は、九州各地から団体客が水越神楽を見に大型バスで訪れていた。現在は、神楽は舞われてお

らず、個人で祭事の日には、御神酒や手を合わせるだけである。祭事の規模は、30年前は、団体客を含めて100人以上であった。

⑥小河内・蟬の尾集落

神社：市山神社

神様：市山様

毎年、旧暦の11月16日に祭事が行われている。午前中に市山神社に集まり、前日に作ったしめ縄や御幣を切って鳥居に飾る。その後、神と交信できる女性を中心に祭事が行われ、神棚に御神酒や魚、米をあげて市山様に手を合わせる。その後、畑・鳥の巣神楽や栗の尾神楽を招いて神楽が舞われる。現在は、個人で祭事の日はお供え物をしてから市山様に手を合わせるだけで神楽は舞われていない。祭事の規模は、20年前は30～40人程であったが、現在は個人で市山神社に訪れている。

⑦上松尾集落

神社：上松尾神社

神様：氏神様（上松尾大明神）

毎年、旧暦の11月25日に祭事が行われている。午前9時に上松尾神社に集まり、前日に作ったしめ縄と御幣を切って鳥居に飾る。神棚に御神酒をあげてから米を撒き氏神様に手を合わせる。その後、60年頃前までは、下松尾集落の人々も招き、力自慢大会を行っており、特に相撲大会が子どもから大人まで参加し盛り上がっていた。現在は、上松尾公民館で宴会を行うだけである。祭事の規模は、60年前は、50～60人程であった、現在は14人程である。

⑧唾谷集落

神社：森鹿倉神社

神様：氏神様（森鹿倉大明神）

毎年、旧暦の11月23日に祭事が行われている。午前8時に集落の公民館に集まり、50年前頃前までは、列に並んで森鹿倉神社まで歩いて行く。その際に、先頭の人が法螺を吹きながら歩く。神社に到着後、前日に作ったしめ縄と御幣を切って鳥居に飾り、神棚に御神酒をあげる。その後、米を撒き氏神様に手を合わせる。祭事の規模は、50年頃前は40～50人程であったが、現在は数人で行っている。

⑨栗の尾集落

神社：稲荷神社・森鹿倉神社・天神神社

神様：氏神様（稲荷大明神・森鹿倉大明神・天神様）

毎年、旧暦の11月25日に祭事が行われている。この集落は神社が3つあるため稲荷神社、森鹿倉神社、天神神社の順に午前中に神社に集まり前日に作ったしめ縄と御幣を切っ

て鳥居に飾る。御神酒を神棚にあげて米を撒き氏神様に手を合わせる。その後、栗のお神楽を舞う。この流れを他の2つの神社でも行うが、距離が離れているため終了が午前中を過ぎてしまう。夕方18時から翌朝10時にかけて神楽が公民館で舞われる。40年以上前は、松尾地区全ての集落から見物客が訪れていたため、公民館周辺には出店が並んでいた。この栗の尾神楽は松尾地区の神楽の中で最も古く、畑・鳥の巣神楽は栗の尾神楽から学んだものである。しかし、現在栗のお神楽は舞われていない。祭事の規模は、25年以上前は100人以上であったが、現在は20人程である。

⑩下松尾集落

神社：稲荷神社

神様：氏神様（稲荷大明神）

毎年、旧暦の11月14日と1月14日に祭事が2回行われている。午前中に、稲荷神社に集まり前日に作ったしめ縄と御幣を切って鳥居に飾る。神棚に御神酒をあげて米を撒き氏神様に手を合わせる。その後、11月は神社前の踊り庭と呼ばれる場所で臼太鼓踊りが行われ、1月はもぐらうちといった集落の子どもたちが豊作を祈って藁で田畑の地面をたたいてまわる行事が行われる。現在は、臼太鼓踊りは行われていない。祭事の規模は、50年以上前は50～60人程であったが現在では15人程で行われている。

⑪岩屋戸集落

神社：岩屋戸神社

神様：市山様、氏神様（祇園様・稲荷大明神）

毎年、旧暦の11月16日に祭事が行われている。岩屋戸神社には氏神様（祇園様、稲荷大明神）と市山様が祀られている。午前中に岩屋戸神社に集まり、しめ縄作りや御幣を切ってかけぐりと一緒に鳥居に飾る。また、神棚に御神酒をあげてから米を撒き市山様と氏神様に手を合わせる。その後、数人で太鼓たたきや法螺や笛を吹いていた。さらに、岩屋戸神楽も舞われていた。しかし、現在岩屋戸神楽は舞われていない。祭事の規模は、50～60年前は40人程であったが現在では12人程で行われている。

⑫ロクロ集落

神社：神山神社

神様：市山様

毎年、旧暦の11月9日に祭事が行われている。午前中に神山神社に集まり、前日に作ったしめ縄と御幣を切って鳥居に飾る。また、神棚に御神酒をあげてから米を撒き市山様に手を合わせる。大昔はロクロ神楽がその後舞われていた。しかし、現在ロクロ神楽は舞われていない。祭事の規模は、40年頃前は20～30人程であったが、現在は10人程で

行われている。

⑬春岩尾集落

神社：春岩尾神社

神様：市山様、氏神様（北山様・馬頭観音様）

毎年、旧暦の11月10日に祭事が行われている。春岩尾神社には市山様、氏神様（北山様、馬頭観音様）の3つの神様が祀られている。午前中に春岩尾神社に集まり前日に作ったしめ縄や御幣を切って鳥居に飾る。また、神棚に御神酒をあげ氏神様に手を合わせる。この集落は昔から特徴的な祭事は行っていない。祭事の規模は、50年ほど前は20人以上であったが現在は、数人で行っている。

IV. 考察

(1) 開催時期

松尾地区はどの集落も旧暦の11月に祭事が行われていた。ただし、実施日は各集落により異なっていた。また、竹の八重、野地、下松尾では年に2回祭事が行われていた。どの集落の回答者もこの月に祭事が行われている理由については分からないとの回答であった。（表-2）

(2) 神社・神様の特徴

山の神祭事を行っている集落全ての神社を訪問し、撮影を行った（写真1～15）。調査の結果から、市山様（正式名称：市山槇嶽大明神）は複数の集落で祀られており、集落の山の神とされていることが分かった。その中で、小河内・蟬の尾集落の市山神社に祀られている「市山様」が本家という位置であり、ロクロ集落に祀られてあるのは市山様の分家であり、本社の市山様よりも位が低いことからこの集落の人々は、市山神社に立ち入ることは昔から禁じられていたとのことである。また、その他の集落で市山様が祀られている理由として、各集落の猟師が過去に集落界を超えて猟を行っていた際に市山神社の存在を知り、各集落で信仰するようになったということである。このような狩猟による山の神への信仰の始まりについては、ネリーナウマン（1994）が日本における山の神信仰が最初に始まったのは縄文～弥生時代で、縄文時代の場合、狩猟者信仰によって始まったと推測している。

市山様を祀っていない集落では氏神様という集落ごとに山の土地を守る神様が存在していた。集落により稲荷大明神や森鹿倉大明神などが祀られていたがこれらもすべて氏神様である。氏神様はいわゆる山の神ではないが、聞き取り調査を進めていくと集落の人々にとっては、山の安全や恵みに感謝する対象としての役割を担っていた。つまり、山の神（本地区においては「市山様」）を祀っていない集落

表-2 各集落の開催時期・祭事の規模・実施内容

No. 集落	祭事の規模		開催時期		実施内容	
	過去	現在	過去	現在	過去	現在
①畑・鳥の巣	(30年前) 50~60人 (現在) 10人程度	畑・鳥の巣神楽	COVID-19流行前から神楽が途絶える	COVID-19流行前から神楽が途絶える		
②竹の八重	(30年前) 30~40人 (現在) 10人程度	白太鼓踊り	特徴なし	特徴なし		
③野地	(30年前) 30人程度 (現在) 6人	栗の尾出身の人が神楽を舞う	白太鼓踊りをしない	白太鼓踊りをしない		
④中尾	(30年前) 50~60人 (現在) 5人	水越神楽	COVID-19流行前から神楽・祭り消滅	COVID-19流行前から神楽・祭り消滅		
⑤水越	(20~30年前) 100人以上 (現在) 個人	小河内神楽	COVID-19流行前から祭りが行われていない	COVID-19流行前から祭りが行われていない		
⑥小河内・蟬の尾	(20年前) 30~40人 (現在) 個人	相撲などの力自慢大会	特徴なし	特徴なし		
⑦上松尾	(60年前) 50~60人 (現在) 14人	3つの神社で栗の尾神楽	COVID-19流行前から神楽を行わない	COVID-19流行前から神楽を行わない		
⑧唾谷	(50年前) 40~50人 (現在) 6人	11月は白太鼓祭り 1月はもぐらうち	白太鼓祭りは行っていないがもぐらうちは行われている	白太鼓祭りは行っていないがもぐらうちは行われている		
⑨栗の尾	(25年前) 100人以上	法螺や笛を吹き、それに合わせて太鼓	個人で法螺や笛を吹いたり、太鼓をたたいている	個人で法螺や笛を吹いたり、太鼓をたたいている		
⑩下松尾	(50年以上前) 50~60人 (現在) 15人	ロクロ神楽が舞われていた	特徴なし	特徴なし		
⑪岩屋戸	(50~60年前) 40人程度 (現在) 12人					
⑫ロクロ	(40年前) 20~30人 (現在) 10人					
⑬春岩尾	(50年前) 20人程度 (現在) 8人					



写真-1 畑伊勢神社

(畑・鳥の巣集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/04



写真-2 竹の八重神社

(竹の八重集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/05



写真-3 野地神社

(野地集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/05



写真-4 稲荷神社
(中尾集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/06



写真-7 上松尾神社
(上松尾集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/21



写真-5 稲荷神社
(水越集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/16

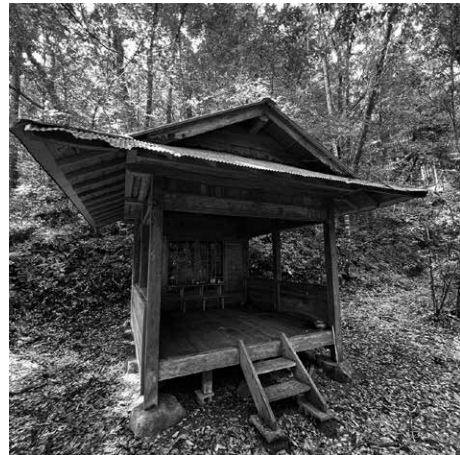


写真-8 森鹿倉神社
(唾谷集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/04



写真-6 市山神社
(小河内・蟬の尾集落)

撮影者：甲斐秀樹 撮影日：2002/07/25

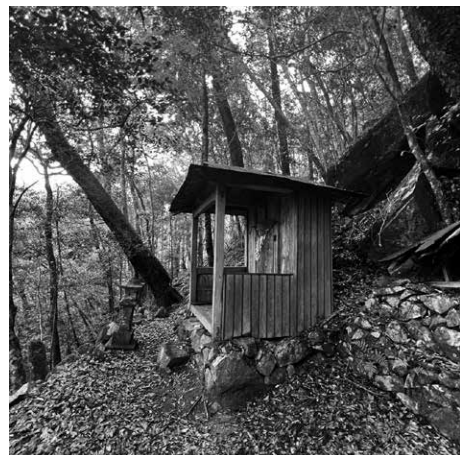


写真-9 稲荷神社
(栗の尾集落)

撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/18



写真-10 森鹿倉神社
(栗の尾集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/18



写真-13 岩屋戸神社
(岩屋戸集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/19



写真-11 天神神社
(栗の尾集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/18

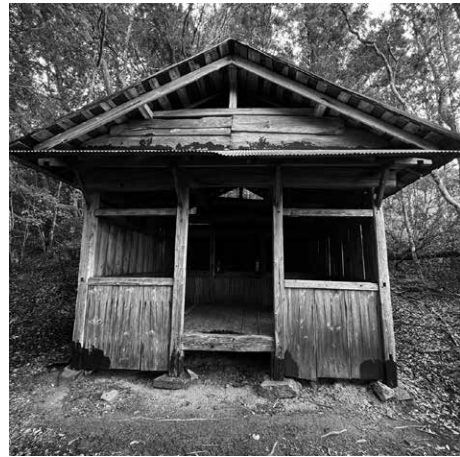


写真-14 神山神社
(ロクロ集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/20



写真-12 稲荷神社
(下松尾集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/17

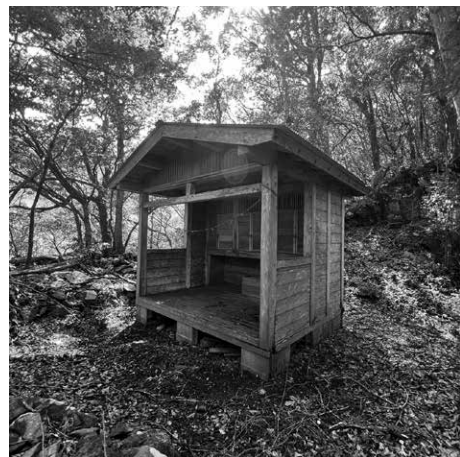


写真-15 春岩尾神社
(春岩尾集落)
撮影者：甲斐峻太 撮影日：2024/09/17

では、氏神様が山の神としての役割を代用しているのではないだろうか。この点は、今後他地区の状況を調査しながら明らかにしていきたい。

(3) 祭事の規模

回答者が記憶している範囲で、最も祭事が栄えていた(参加人数)が多かった頃と、現在の参加人数について回答を得た。結果として、全ての集落において過去と比べて参加人数が激減していた。また、水越や小河内・蟬の尾等の集落では、現在個人で山の神祭事を行っていることが明らかとなった。(表-2)

(4) 実施内容

どの集落も昔も現在も祭事当日にしめ縄や御幣を鳥居に飾って、神前に御神酒をあげ、米や塩を撒いてから神様に向かって手を合わせるまでの流れは共通していた。そのため表-2の実施内容には共通の流れを省略した。また、それ以外に祭事の日に行う行事がなかった集落は「特徴なし」と記載している。山の神祭事は地区全体で内容が統一されておらず、神楽や臼太鼓踊りなどその集落独自の山の神祭事が存在していた。

神楽については、以前は6集落で行っていたことが分かり、最後に神楽が途絶えたのは2020年のCOVID-19流行前であった。水越集落の回答者(80代)によると、最も参加人数が多かった20~30年前には、祭事の日九州各地から水越神楽を見に来る団体客が100人以上いた。その際、水越集落の人々は団体客に無償でお酒や料理を振る舞っていたが、その当時は祭事の運営資金を集落の人々だけで負担していた。そのため、赤字が毎年続き団体客の受け入れが困難になり、数年後には団体客の受け入れを中止にした。それに伴い祭事の規模も小さくなり、神楽伝承の担い手がなくなったことから、現在では神楽も途絶え、個人で祭事の日には手を合わせるだけだと語っていた。他の神楽を行っていた集落も同様に、人口減少や担い手不足によって神楽が途絶えたことが明らかとなった。(表-2)

IV. まとめ

今回の松尾地区の各集落の聞き取り調査結果から、6集落で市山様(正式名称:市山楨嶽大明神)と呼ばれる山の神を祀っていた。また、小河内・蟬の尾集落にある市山神社に祀られてある市山様が本家であり、他の集落でも同じ市山様が祀られるようになった背景としては、獵師が自分の集落に市山信仰を広めたとのことである。市山様を祀っていない集落には、それぞれの集落の山の土地を守る神様である氏神様が祀られていた。この氏神様は、それぞれの

集落の人々にとって山の安全や恵みに感謝する対象としての存在、山の神に準じる存在となっていることが今回の聞き取り調査により明らかになった。祭事の実施時期、内容については地区全体で統一したものはなく、各集落で独自の様式となっていた。

今後の研究課題として、他地区との比較をすることで、各集落における山の神祭事の位置づけを解明して、椎葉村における山の神文化の多様性を明らかにしていきたい。

引用文献

- ネリーナウマン著, 野村伸一・檜枝陽一郎 訳(1994) 山の神, 464pp, 言叢社
- 西川希一・奥山洋一郎・枚田邦宏(2021) 全国の大学演習林における「山の神」祭行事の現状 九州森林研究 No.74, 9-12
- 西川希一・奥山洋一郎・枚田邦宏(2022) 四国地方の森林組合における「山の神」祭行事の現状について 九州森林研究 No.75, 17-21
- 西川希一・奥山洋一郎・枚田邦宏(2023) 中国地方の森林組合における「山の神」祭行事の特徴と西日本での分析 九州森林研究 No.76, 9-13
- 柳田邦玲雄・松本武・岩岡正博(2016) 中部地方の森林組合における山の神の信仰形態の特徴と地域性 中部森林研究 No.64, 73-76

要旨

全国各地に、山の神のための祭事、儀式、行事などが多様に存在し、古くは、縄文時代から存在していることが明らかになっている。今回の研究は、神楽や平家の落人伝説などの文化の残る歴史ある場所である、宮崎県椎葉村で山の神と関連した神楽や焼畑が現在も伝承されている中、松尾地区だけが神楽が途絶えていたことが明らかとなり松尾地区の21集落を調査対象とした。そこで本研究では、山の神と関連した神楽や焼畑などが盛んな椎葉村で神楽が途絶えた松尾地区の独自の山の神祭事を調査することで松尾地区の山の神文化の特徴を明らかにする。その結果、6集落に共通の山の神が祀られており、その他の集落では氏神様が祀られていた。また、15の集落で独自の山の神祭事が存在していた。